

# 長期化する不登校児の社会参加支援

—思春期・青年期における自己イメージの検討—

13004PCM 佐藤 美礼

## 問題と目的

### 1. 長期化する不登校の背景

厚生労働省によると、中学校においては50.6%、高等学校において41.1%が前年度から不登校を継続する状況になっており、高校の中途退学31.8%を含めると、不登校状態にある生徒の実に7割以上が、学校に復帰することなく不登校が長期化するか退学するか状況にある。不登校生徒の多くは、①統合失調症を中心とする精神病、②スキゾイドパーソナリティのlow functionを中心とするパーソナリティ障害、③自閉症をベースとした対人関係での傷つきによるフラッシュバック、の3群に分けられることが示唆され(杉山,2007)、秋山(2007)は、長期化する不登校児は発達課題が充足されず、不登校からひきこもりを経てフリーターやニートへと変化する可能性が高いと警鐘を鳴らしている。先述した3群では、それぞれ背景要因や取り組み課題に違いがあるが、その判別には、詳細な生育歴や自己の内的体験の把握が必要である。

### 2. アタッチメント障害の子の青年期

上記の3群のうち、青年期において①の精神病や②のパーソナリティ障害へと移行するリスクの高いものは、幼児期・児童期にアタッチメント形成上の深刻な課題を抱えるものであると考えられる。この研究では、そうした移行期における心の課題の質的变化に目を向けて、自己ないし自己イメージの変容の転機を探ろうとするものである。

### 3. 本研究の目的

本研究の目的は、以下の2点である。①不登校が長期化した事例について、それぞれの背景要因を明らかにし、社会参加へと至るための支援策を考察する ②そうした事例が思春期・青年期に差し掛かった時に課題になることとその支援方針について考察する

## 方法

**研究協力者:** 不登校児童を中心とした私立学園に通う中学生2名、高校生2名、卒業生(現在は大学生)1名(男性4名、女性1名)。

**手続き:** 協力者に対し個別面談を行い、簡単なインタビューの後、次の心理検査を実施した。

①ロールシャッハテスト: 自己の体験内容、体験様式や対人関係イメージなど、心の課題を幅広く捉えるために実施した。②バウムテスト・人物画テスト: 自己イメージを多角的に捉えるため、2種類の描画法を実施した。③考察にあたっては、フリースクール内での行動観察記録や生育歴・教育歴に関する情報を参考にし、前年度までの先行研究(花田,2013;大久保,2013;早川,2014)の内容とあわせて経過を検討した。

## 結果

**事例1**(男性, 21歳, 大学2年生): アスペルガー障害の診断はあるが、生育歴の情報は得られず、心理検査から、自我のコントロールが難しく、関係性への意識は強いものの、空回りし、現実世界に根付いておらず、アタッチメント障害(以下:AD)からパーソナリティ障害圏への移行期と思われた。支援方法としては、生活療法的な視点を取り入れ、崩れかかっている生活の土台を固めることが第一だと考えられる。

**事例2**(男性, 高校3年生): 発達早期の母子分離と強い発達圧力が想定され、AD事例と判断した。心理検査からは自己存在の曖昧化と流動化、愛情対象への接近欲求と自己の傷つき、ペルソナの未確立などの課題が浮き彫りになった。支援方針として家族団らんイメージの生成、自己肯定感の獲得が考えられる。

**事例3**(男性, 18歳の高校3年生): 行動観察から、情緒的な対人関係の中での傷つきが想定され、心理検査からは無力感や無能感によって自己存在感の稀薄化がみられ、演技性パーソナリ

ティ障害と判断した。支援方針として、生活スキルの獲得による生活者としての自己を育て、自己存在の実感を手繰り寄せる手掛かりとして自己イメージを確保することが考えられる。

**事例 4**(女子, 14 歳, 中学 3 年生): アスペルガー障害の診断があるが, 早期の母性剥奪と虐待体験の影響が推測され, AD をベースにする事例と考えられた。描画には, 自我漏洩感とそれに対する過剰防衛があり, 複数化した自己をまとめあげようとする, 空虚感と攻撃性が漏れ出してくるような不安を抱えた自己イメージが表現された。また, ロールシャッハテストには混交反応がみられ, 病理水準としては精神病圏であり, 統合失調症の発症期と考えられる。

**事例 5**(男性, 中学 2 年生): 情緒的な対人関係の中での傷つきが見られ, AD 事例と判断した。心理検査からは, 攻撃性や破壊衝動のコントロール不全と, 自我に対する過剰な防衛が見られ, 人とかかわることの不安感あるいは抵抗感が表現された。支援方針として, 現実の生活場面に視点におき自己存在感の獲得が考えられる。

## 考察

### 1. アタッチメント障害の子の自己イメージ

早川・後藤(2015)では, 自閉症圏の子どもの場合に身体性を含めて自己存在感が消失ないし断片化の体験といった, スターン(Stern,1985)のいう新生自己感への後退がみられるとしたうえで, AD 圏の子どもにおいては, 自己の曖昧化や拡散, 正体不明の不気味な自己へと変成する不安のような, 中核自己感の動揺がみられることを示唆している。今回の 5 事例はいずれも, 自己あるいは自己イメージの傷つきや変成する不安を抱えており, そのための自我防衛としての病理行動を進展させたものと考えられる。

### 2. 思春期課題と支援の方針

#### (1) コンテナの提供

長期化する不登校の彼らは, AD を基盤にしつつ, 思春期から青年期にかけて, パーソナリティ障害もしくは精神病圏へ移行ないし展開しようとする事例と捉えることができる。自己内界を語りつつ自我ないし自己イメージを修復し整理することに主眼を置く, 従来の個別心理面

接のみでは十分な支援とならない。その課題に取り組む前に, 彼らには共通の課題として, 自己存在感の希薄化, 自我境界の曖昧化が挙げられるため, 自己内に留めておくべき衝動や情緒が漏れないように, 中核のないあいまいな存在の自己が消えてしまわないように‘守る’ということが必要になる。生活場面全体をコンテナにして包みこんで守る, ということに視点を置く対応が求められる。

#### (2) 生活療法的視点を持つこと

内的体験に迫っていく心理療法的な視点を踏まえながらも, 生活者としての自己の形成を目指していくことが必要になる。毎日の生活を自分の力で過ごすことができるという感覚の獲得が, 日常行動に実感を与え, 自分が行為の主体であるという感覚を生むとともに一人の生活者としての自己イメージが生成されていくと考えられる。

#### (3) 内的世界を現実場面につなぐこと

生活場面での体験は, 新たな自己との出会いを生むことになり, 彼らの内には戸惑いと不安が体験される。病理水準の重さ故に, より一層自分が自分でなくなって正体不明で不気味な存在に変わってしまうという不安が容易に生じる。それだけに, いつもと変わらぬ安定的で枠組みの確かな関係性の確保が重要となる。同時に, 新しく出会う, 部分対象化された自己のパーツに肯定的な意味づけを探り, それを取り込んだ新しい自己を育てるという視点を導く, という狙いを持った心理面接が求められる。外的生活体験が内的体験として取り込まれて, 両者を統合していくためには, そのことを視野に入れた個別心理面接が不可欠である。

#### 今後の課題

5 事例のみの検討ではあるが, 今回示唆されたことは, ①AD の子どもへの対応として, より早期から自己イメージの生成ないし修復の課題に取り組む必要があること, ②自我防衛のあり方を視点として, 多様な病理の複合体とみられる AD の子ども達の類型化の必要性が示唆されたことの 2 点である。さらに経過を追って, 内的体験の内容と発達過程を検討していきたい。